

教育部門 受賞者

堀内 成子

聖路加国際大学 学長

助産師が自立して活躍するため、 院内施設創設や教育制度改革に挑む



堀内 成子

Shigeko Horiuchi

聖路加国際大学
学長

1978年、聖路加看護大学衛生看護学部卒業。1982年、東京大学大学院医学系研究科保健学専攻修士課程修了(保健学修士)。1993年、聖路加看護大学大学院看護学研究科看護学専攻博士後期課程修了(看護学博士)。2002年、University of Michigan School of Nursing Visiting Research Fellow。1994年、聖路加看護大学看護学部及び大学院看護学研究科教授。2003年、同大学看護学部及び大学院看護学研究科学部長・研究科長。2010年、聖路加産科クリニック助産師/副所長。2018年、聖路加国際大学看護学部学部長。同大学大学院看護学研究科研究科長。2020年より現職。

推薦者

坂本 すが

東京医療保健大学 副学長

片岡 弥恵子

一般社団法人日本助産学会 理事長

高田 昌代

公益社団法人日本助産師会 会長

助産師が本来の仕事をするために

2010年6月、聖路加国際病院の敷地内に、助産師が中心となって運営する自然分娩に特化した「愛といのちの家 聖路加産科クリニック」が誕生した。このプロジェクトを、発起人として推進したのが堀内成子氏である。2008年頃は、分娩を取り扱う施設が減り、“お産難民”の増加、産科医療の崩壊と言われていた。そんな中、逆転の発想で、助産師が妊婦健



病院敷地内に新築された聖路加産科クリニックの建物は、緑、風、光を感じ、人のぬくもりのある家のような空間をめざし、分娩台を使わない出産も可能にした。

診から分娩、産褥期のケア、育児相談までを継続して行う施設を開設したのだ。助産師が妊婦の産む力、生まれる力を引き出し、妊娠・分娩が正常範囲に留まるよう協働する。この施設で出産をした母親たちからは、「また戻ってきたい。幸せで豊かな経験ができた」などの声が寄せられていた。

助産師が自立して活躍できる場を整えるだけでなく、助産教育の大学院修士課程への道を拓いたのも堀内氏だ。看護学部4年間の中で助産師国家試験に必要な科目も選択すれば、看護師と助産師の資格が同時に取得できる^{*1}。しかしこれでは、看護基礎教育も助産教育も十分にできないと考えていたのだ。学内外からの反対も多く、なぜ助産師だけ大学院なのか、志願者が減る、資格取得に複数の道ができる等の声が挙がった。当時理事長だった日野原重明氏からの「新しいことをやろう」という後押しもあり、文科省への相談を開始する。そして遂に、2005年、助産教育の大学院化が実現する。議論開始から10年の歳月が経過していた。

日本の助産技術を海外へ伝える

堀内氏は、助産教育の認証評価機構(日本助産評価機構の創設)も行う。①助産師教育機関(専門職大学院等)の教育評価^{*2}、②助産所の認証制度、③助産師個人の認証制度である。③では、2015年に『アドバンス助産師制度』を創設する。助産師の資格は一度取得すれば生涯保持できるが、「助産師は生涯、知識・技術を磨き続けなければならない」と堀内氏。2023年現在、8,951名がアドバンス助産師として活躍している。また堀内氏は、12年以上にわたり日本学術振興会のプロジェクトを通じ、助産師による妊婦教育、きめ細かなケアを、アジア・アフリカ諸国に技術移転する研究を行ってきた。サハラ以南のアフリカでは、妊産婦の死亡率は出生10万人あたりおよそ551人^{*3}となっており、Women-Centered Care(女性中心のケア)の考えのもと、妊産婦の健康改善と死亡率の低減をめざしている。

助産の現場も変化している。助産師の守備範囲は拡大しており、ハイリスク妊娠の予防教育、流産・死産などの周産期喪失ケア等のメンタルケアも、必須の役割となっている。「妊婦さんの声に耳を傾けられる助産師を育てていきたい」と堀内氏。温かな眼差しは、常に女性たちに寄り添っている。



大学院生とタンザニアでの家庭訪問後の様子。現地大学との共同研究により、若手研究者の育成を行ってきた。

^{*1} 助産師の資格を取得するには、その他、看護師資格を取得したのち、助産師養成学校等で1年以上学んだ後、国家試験に合格するルートもある。^{*2} 教育評価では、専門職大学院だけでなく、大学院・大学専攻科・専門学校なども、助産分野の認証評価を行っている。^{*3} UNICEF ; Trends in maternal mortality 2000 to 2020, 23.Feb.2023